不定期刊行　　第504号　2013.11.12

中信高校山岳部かわらばん

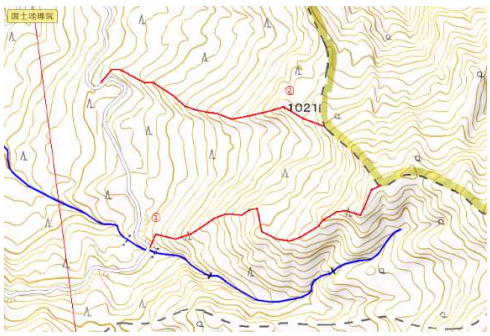
編集責任者　大西　浩
池田工業高等学校

国立登山研修所ＧＰＳ（単なるＧＰＳの使い方ではない）研修会

11月8日から10日まで国立登山研修所の安全登山普及指導者中央研修会に参加した。489号、490号の続報とも言える内容なので、そちらと合わせてお読みいただければありがたい。この研修会は同内容で年に2回（7月と11月）行われるのだが、昨年来、この研修会では読図プランニングコースの特設コースとしてＧＰＳを積極的に使うコースのカリキュラムを検討してきた。過去2回はＧＰＳの扱いに長けた経験者を研修生に迎え、いろいろなシミュレーションを行って課題を洗い出し、実際に研修会を設定するにあたってのカリキュラムを編成してきた。今回はそこで組み立てたカリキュラムの実践第1回目の研修会であった。講師は村越真さんと僕（といっても実質的には村越さんにおんぶにだっこ状態）が務めた。講師2人に研修生は6人（高校の先生が3名、大学の山岳部リーダー2名、社会人山岳会の指導者1名）という少人数で、しかも地図読みの第一人者である村越さんの指導を仰げるとは、国立登山研修所ならばこその好環境である。講師という立場ではあったが、僕自身も大いに学ばせてもらうことができた。

初めに村越さんの講義が行われた。そこでは、この研修の目標を①ＧＰＳに対する適切な認識（特長・限界）、②日本の環境・登山形態に合った利用法、③ＧＰＳ利用を安全登山全般の中で位置づける、という3点に置くことを明確にした上で、ＧＰＳという便利なツールを使ってより高いレベルのナヴィゲーションスキルを身に着け、安全登山への興味関心を喚起して遭難事故の減少に役立てるための研修会であることが確認された。そしてここで得た内容をリーダーとして、いかに山岳部員や山岳会員に伝えていくかを学び、伝えていくことを研修する会であることが強調された。

ＧＰＳの仕組みの説明は、極めて専門的な内容だったが、村越さんの講義は非常に整理されていてわかりやすかった。この日は、オブザーバーとしてマゼランのＧＰＳの開発に携わっておられる上遠野さんという方も研修会に参加してくださったため、重層的な解説で一層理解が深まった。僕自身の9月2日の焼岳での経験（前号までのかわらばん参照）がなぜ起こったのかなど具体的な事例も紹介しながら、ＧＰＳを使いこなす上での基本を理解するために大いに参考になるものだった。講義の後は、研修生が実際にＧＰＳを使ってできることを出し合い、それをどうこなしていくのかを議論し、翌日の実習コースについてカシミールとの連携操作をしながら、計画を立てた。この研修会の名称は「読図・プランニングコース」である。その名の示す通り、読図から実際の山行計画をプランニングするということを学ぶ研修会である。読図あればこその計画ということは、ＧＰＳ班であろうが、旧来の紙地図・コンパス班であろうが当たり前のことであるが、ＧＰＳとカシミールの活用はその多くの部分に革新的な変化をもたらしたと言っても過言ではない。結果、それは紙地図による従来のスキルの負荷を大幅に軽減し、その分他の要素へと進める点で画期的である。つまりＧＰＳを使うことでより高いレベルのナヴィゲーションが可能となるということでもある。しかし、それとて、ベースとなる地図とコンパスの技能の習得が先立つのは言うまでもない。



研修２日目は、初日に立案した計画に沿って、登山道のない山中で藪を漕ぎながら研修を行った。午前中は①大辻山をフィールドにして設定した尾根（標高差 250m、水平距離 900mほど）をコンパスとＧＰＳを併用しながら登る、②設定した尾根（標高差 200m、水平距離 750mほど）をＧＰＳだけで下る。という二つの課題を設定して、現在地把握→プランニング→ルート維持というサイクルを繰り返しながら、ＧＰＳの基本的な使い方の習熟を図るとともに、メリット・デメリットの検証を行った。（左図参照）

午後は最初に長尾山の複雑に尾根が分岐しているルート（標高差 200m、水平距離 850 mほど／かわらばん 490 号図１参照）で、研修生が２人１組になり、それぞれの組ごとに１人はコンパスと紙地図で、今１人はＧＰＳを使いお互いに補い合いながら、ルートを辿るという実習を行った。２人１組というのは最近村越さんが読図講習会でしばしば採用する手法とのことだが、読図スキルをアップするための有効な手段だという。頼り頼られる関係の中で、二人がコミュニケーションをとりながら、ある面では教え、また教えられるという中で、鍛えられていく。この手法は安全を確保した上で行えば、高校山岳部のスキルアップの場面でも活用できると思った。読図技術は個人差も大きく、顧問が１人で大勢の部員に指導していたのではなかなかなかなか身につけさせるのが難しいが、この方式はその個人差もうまく活用しながら、両者がレベルアップできる有効な方法であると感じた。ただし、このコースは研修生の皆さんにはかなりハードルの高かった課題でもあり、ＧＰＳがあってもルート維持にはかなり苦戦をされていた。つまり、言い換えればＧＰＳという伝家の宝刀が手に入っても、紙地図とコンパスによる地図読み技術、現地の地形を見て現在地を把握する技術なくしてＧＰＳを使いこなすことはできないと言うことが実証されたわけである。それは研修後に研修生の皆さんが異口同音に言っていたことでもある。

この日の研修はきわめて盛りだくさんで、最後の実習として、微地形で読図が難しい場所でウェイポイントナヴィゲーションを行って締めくくった。これはかわらばん 490 号でも紹介した雄山神社裏のコース（かわらばん 490 号図２参照）を短縮しての実習となった。こうして、前回７月に作成したカリキュラムを一通りこなして、この日の実習を終えた。研修所に帰ってからはデータの整理を行い、それぞれが実際の活動の中でＧＰＳ利用にあたって感じた内容を出しあった。

最終日は、昨日の実習を振り返りながら、ここで経験したことを持ち帰って自分の学校やクラブでどう還元するかということについて社会人、高校顧問、大学生に分かれて①ＧＰＳをどんな目的のために使うか、②ＧＰＳをどのように使うか、③ＧＰＳが活用される今読図力育成の意義をどう伝えるか、④ＧＰＳ担当に何を教え、何を指示するのか、という４つの観点からそれぞれ意見交流をしながら指導案としてまとめる作業を行った。３日間を通して参加者は終始前向きで、その姿勢からも私自身大いに教えられることがあった。こんな私にこのような場を与えていただいている研修所に感謝しきりである。